

和歌山市民のための和歌山文化遺産かるた nagusa tobe (ナグサトベ)

読み札解説

あ 「秋風の吹上（ふきあげ）に立てる白菊は花かあらぬか浪（なみ）の寄するか」と詠んだのは、平安時代の貴族・菅原道真（すがわらのみちざね）。秋風に揺れて立つ白菊は本当に花なのだろうか、それとも白い浪が寄せているのだろうかという意味で、『古今和歌集』に収められています。かつて吹上のあたりは砂丘で、白菊の花が群生していたとか。今、その面影はありませんが、吹上小学校の校歌に「白菊の花ゆかしやな」と歌い継がれています。

い 山東（さんどう）の集落に鎮座する伊太祁曾（いたきそ）神社は、木の神様である五十猛命（いたけるのみこと）（別名は大屋毘古神（おおやびこのかみ））を祀（まつ）ります。『古事記』によると、この神様は木の俣（また）をうまく利用して大国主神（おおくにぬしのかみ）の危機を救ったそうです。神社の拝殿にはぼっかり穴のあいた御神木が安置され、くぐり抜けると厄（やく）落としになるといわれます。多くの参拝者が『古事記』の神話にちなんでくぐり抜け、ありがたい御利益（ごりやく）を授かっているようです。

う 小説『紀ノ川』は和歌山市出身の作家・有吉佐和子（ありよしさわこ）の代表作のひとつです。自身のルーツである和歌山の名家をモデルにした作品は高く評価され、映画やテレビドラマにもなりました。紀ノ川を舟で下って嫁いでゆくシーンが印象的で、紀州弁の「美（う）つついのう」は主人公の名セリフ。「紀ノ川ほど美つつい川は他にはございませぬよし」と語るヒロインに、紀州女の誇りとたくましがにじみます。

え 和歌山市民なら誰でも一度は訪れる「お城の動物園」。整備が始まったのは大正四年で、日本で四番目に開設された歴史ある動物園とされています。正式名称は「和歌山公園動物園」で、ポニーやペンギン、リスザルなどが飼育されていますが、一番の人気はツキノワグマのベニーちゃん。「ベニーちゃんが冬眠に入りました」というほのほのしたニュースは、和歌山市の冬の風物詩です。

お 日本ではじめて飛行船を開発した山田猪三郎（やまだいさぶろう）は、江戸時代末に和歌山城下で生まれました。周囲から工作少年として知られていた猪三郎は、その後上京し、気球や飛行船の製作に取り組みました。「山田式」とよばれる国産初の飛行船を東京の空に浮かべたのは明治四三年九月八日。ふんわりと浮んだユーモラスな飛行船は、当時の人々にとって驚きであり、そして未来の夢へのシンボルでもあったことでしょう。

か 秋月にある日前神宮（ひのくまじんぐう）と國懸神宮（くにかかすじんぐう）は日本でもっとも歴史ある神社のひとつです。日前神宮は日像鏡（ひがたのかがみ）を、國懸神宮は日矛鏡（ひぼこのかがみ）をご神体としてそれぞれの神様を祀りますが、言い伝えによると、この二柱の鏡がつくられたのち、三種の神器として知られる八咫鏡（やたのかがみ）がつくられ伊勢神宮に祀られたといます。現在ではふたつの神宮をあわせて「日前宮（にちぜんぐう）」とよび、正月には初詣、秋には七五三詣の市民で賑わいます。

き 明治時代の中頃に和歌山市に生まれた版画家・田中恭吉（たなかきょうきち）は、東京美術学校（現在の

東京芸術大学)に進学し彫刻を学ぶかわら、当時流行していた創作版画(画家自らが印刷までを行う、複製を目的としない版画)の作品を発表しました。恭吉は肺結核のため二三歳の若さで亡くなりますが、小さな版画に刻まれた生命感あふれる作品は、今日を生きる私たちに何かを語りかけようとしています。なお、かるたの「月に映え」の言葉は、恭吉が友人とともに制作した版画と詩の作品集『月映(つくはえ)』にちなんだものです。

く 世界的な博物学者・南方熊楠(みなかたくまぐす)が生まれたのは江戸時代末の和歌山城下です。和歌山中学校(現在の和歌山県立桐蔭高等学校)を卒業した熊楠は、東京の大学を経てアメリカやイギリスに留学。帰国後は田辺に住んで粘菌の研究などに打ち込みました。熊楠が愛用した硯を見ると、中央が深くえぐれて膨大な量の書き物をしたことがわかります。「知の巨人」と称される熊楠の生誕地には今、天才の偉業を伝える銅像が建っています。

け 和歌山駅から東西に伸びる「けやき大通り」は、大正時代からの歴史を持つ和歌山市のメインストリートです。ちんちん電車と呼ばれた路面電車が、現在の和歌山駅から公園前まで開通したのは昭和五年のことでした。路面電車はその後も多くの市民に愛されましたが、車社会の到来で昭和四六年に廃止。昨今では市街地活性化のために、路面電車を復活させようという声もあがっています。

こ 和泉山脈の南麓(なんれい)、和歌山平野を見渡す丘陵に築かれた大谷古墳(おおたにこふん)は、全長六七メートルの前方後円墳です。発掘調査で多くの副葬品が出土しましたが、注目を集めたのは馬の顔面を覆った馬冑(うまかぶと)。朝鮮半島との交渉を物語る貴重なもので、完成品の出土は日本に類例がありません。ちなみに古墳に埋葬されていた人物は、朝鮮半島や大和朝廷と関係が深かった紀氏(きうじ)一族と推定されています。

さ 友ヶ島周辺を漁場とする加太(かた)では、年間を通してマダイが水揚げされます。紀淡海峡(きたんかいきょう)の厳しい潮流にもまれて育つマダイは、ぷりっと身が締まって脂(あぶら)のノリも抜群。中でも一番の旬は春と秋。産卵期の春は桜色に染まっているから桜鯛(さくらだい)、ウロコの赤みが強い秋は紅葉鯛(もみじだい)と呼ばれて珍重されます。伝統的な一本釣り漁法で狙うのは極上の天然もの。漁師たちの心意気も味のうちかもしれません。

し 紀伊水道では古くから、しらす漁が盛んに行われてきました。茹でたてのふっくらした釜揚げしらすや、新鮮なちりめんじゃこを味わえるのも海辺のまちならではの。熱々のごはんにのせると、磯の風味が食欲をそそります。しらすに紛れ込んだ小さな生き物を探すのも楽しみのひとつです。エビやカニの赤ちゃんも嬉しいけれど、タツノオトシゴを見つけたら大当たりでしょう。

す かつて水軒浜(すいけんはま)は、紀ノ川河口から雑賀崎まで松林が続く風光明媚(ふうこうめいび)な砂浜でした。夏は多くの海水浴客で賑わい、子どもたちの水練教室も開かれていました。埋め立てが始まった昭和三八年以降、風景は大きく変貌してしまいます。当時を記憶する市民が中心となって平成二〇年に住民団体が立ち上げられ、松林を再生させ、美しい水軒浜を後世に伝えようとの取り組みが続けられています。

せ 加太の沖に浮かぶ友ヶ島（ともがしま）には、かつて日本軍の要塞施設（ようさいしせつ）がありました。多くの兵隊が駐屯（ちゅうとん）していた島にはレンガ造りの砲台などが遺されて、ひっそりと朽ちながら時を刻んでいます。廃墟の島が注目されるようになったのは、アニメ『天空の城ラピュタ』の舞台に似ているから。島めぐりに訪れる若者たちと同じように、かつてファンタジーが大好きな若者がいたかもしれません。

そ 文豪・夏目漱石（なつめそうせき）が講演のために和歌山を訪れたのは、明治四四年の夏でした。和歌浦の旅館「望海楼」に宿泊し、奠供山（てんぐやま）のエレベーターにも乗ったとのこと。その体験を小説『行人』（こうじん）の中に描き、「無風流な装置には違いないが、浅草にもまだない新しさ」と綴っています。ちなみに行人とは旅人の意味。漱石の文庫本を片手に、旅人の目線で街を歩いてみると新たな発見があることでしょう。

た 「行春（ゆくはる）に和歌の浦にて追い付きたり」と詠んだのは、江戸時代の俳諧師・松尾芭蕉（まつおばしょう）。まるで旅人のように去ってしまった春と、和歌浦の地で再び出会えた嬉しさが伝わる句です。無邪気に喜んでいるようで、あえて字余りにしているところが心にくい。一七世紀末、貞享（じょうきょう）五年の作とされ、句碑は和歌浦の芦辺屋旅館跡に立っています。和歌の神様を祀る玉津嶋神社に、芭蕉も参拝にやってきました。

ち 伝説の鉄砲使いといわれる雑賀孫一（さいかまごいち）は、戦国時代に紀伊国北西部を治めていた武将。石山合戦で織田信長の軍勢を苦しめたことでも知られます。孫一が生まれた雑賀庄（さいかのしょう）は、現在の和歌山市。当時は強力な大名の支配もなく、人々が自由に暮らせる町だったようです。孫一の足跡を示す史料は多くはありませんが、秋葉山の山頂に雑賀衆の山城があったことを示す案内板が静かにたたずんでいます。

つ 『万葉集』にも詠まれ、古代から愛されてきたツツジ。和歌山市の花でもあり、ゴールデンウィークになると街のあちこちで咲き誇るので、蜜を吸いつつ帰る子どもの姿も見かけます。「白い花より赤い花のほうが甘い」という噂が、まことしやかに流れたり。お菓子が豊富にある時代だから、ほのかに甘い花の蜜はちょっと特別な味。とはいえ、毒性には注意が必要です。

て 『群山記（ぐんざんき）』（和州吉野郡群山記）の作者、源伴存（みなもとともあり）は江戸時代後期の和歌山の本草学者です。本草学という学問は、単に植物に限るものではなく、私たちの目の前にある動植物や鉱物の名前を知り、また私たちの生活とどのように関わりをもつのかをさぐるものです。伴存は繰り返し紀伊山地に足を踏み入れて、多くのノートを取り、正確なスケッチをつくり、渾身の大作『群山記』をあらわしたのです。

と 和歌山市のシンボルは言わずと知れた和歌山城で、天守閣がそびえる虎伏山（とらふすやま）は「おてんす山」とも呼ばれます。こんもりと虎が伏すような形が虎伏山の名の由来。天守閣からは紀ノ川の河口や紀伊水道を眺めることができます。童謡「鞠（まり）と殿さま」の作詞をしたのは西條八十（さいじょうやそ）で、作曲は中山晋平（なかやましんぺい）。「てんでんでんまり てん手まり」と口ずさめる和歌山市民も多いことでしょう。

な 紀三井寺参拝や桜見物の観光客で賑わう名草山。『日本書紀』によると、かつての名草山一帯は名草戸畔（なぐさとべ）という女性が治めていましたが、イワレヒコ（後の神武天皇）との戦いでころされてしまったと記されています。しかし和歌山の各地ではさまざまな言い伝えが存在し、そのなかには、平和を愛する名草戸畔は民を守るために剣を捨て降伏したというものもあります。

に 紀州忍者・名取三十郎正澄（なとりさんじゅうろうまさずみ）の墓石が、吹上の恵運寺（えいうんじ）で発見されたのは平成二四年のこと。三十郎は忍術伝書『正忍記（しょうにんき）』を記した紀州藩士で軍学者。免許皆伝とは師匠が弟子にその道の極意を伝授することで、上中下の三巻からなる『正忍記』には正しい忍者のあり方が説かれています。犬をおとなしくさせる方法、山中で迷った時の対処法、異性に気を許すな、など、現代にも役立ちそうな知恵もいろいろ。

ぬ 布引（ぬのびき）地区の砂地で栽培されている布引大根は、日本各地で多く栽培されている青首大根の一つです。収穫時期になると白い食用の部分が太くみずみずしく育ちます。収穫時の畑の様子は布引という言葉通り、布を干して、はためているさまを思い浮かべることができます。日本では主に煮物や漬物など、味を染み込ませて食べるのが主流ですが、世界各地ではいろいろな食べ方があるようです。

ね 紀三井寺は西国三十三所第二番札所の観音霊場として知られる古刹（こさつ）。楼門から上には二三一段の急な石段があり、途中には湧き水の「清浄水（しょうじょうすい）」が清らかに流れ落ちています。杖をつきながら上るお遍路さんたちも、ここでいっぷく。さらに上ると和歌浦湾を一望できる境内です。江戸時代に建立された総檜（ひのき）造りの本堂や、安土桃山時代の鐘楼など、歴史ある建物も見どころです。

の 毎年一月九日から一日に、全国各地の戎（えびす）神社でおこなわれる祭礼「えべっさん」。商売繁昌を祈願する人々で夜まで賑わいますが、欠かせないのが紅白の「のし飴」です。ひらがなの「のし」の形に似せた素朴な飴で、和歌山以外では見られない縁起物。作り方は砂糖と水を煮詰め、まだ熱くて柔らかいうちに曲げたり伸ばしたり。昔ながらの手仕事が脈々と受け継がれているのです。

は 和歌山市には、古くからのれんを守る中華そばの名店が数々あります。それぞれ微妙に味が違うので、その日の気分で選ぶのもよし、頑固に通い続けるのもよし。テーブルの皿に盛られた早寿司は、中華そばと相性抜群のサイドメニュー。何個食べても自由で、お金を払う時には誰もが正直に個数を告げます。性善説（せいぜんせつ）にもとづく取引が日常的に繰り返され、これぞ誇るべき和歌山の文化と言えるでしょう。

ひ 夏の終わりにお地藏さんの前で行われる地藏盆（じぞうぼん）。子どもたちの無病息災（むびょうそくさい）を祈る小さな祭で、涼しくなってきた夕刻から始まります。主役は子どもたちで、ゴザの上にはお菓子や食べ物、おもちゃなど。和歌山の名産品・ショウガの効いた冷やし飴は、少しほろ苦いおとなの味でした。地藏盆が終わったら、夏休みもあと少し。かつて宿題に追われていた子どもたちも、今は地域の子どもを見守るおとなになっていることでしょう。

ふ 戦災で焼け野原になったぶらくり丁が復活を遂げ、賑わいを取り戻したのは昭和三〇年頃のこと。当時は

近代的な設備だったアーケードも完成し、雨の日も多く買い物客で賑わっていました。まっすぐには歩けないほどの人混みを、ふと思いで懐かしく、さみしく感じる市民も多いはず。百貨店や映画館も今はなく、セピア色の遠い記憶となってしまいました。しかし最近では市民活動により賑わいを取り戻しつつあります。

へ 結婚や出産などのお祝いを頂いたら、お返しとして送るのが内祝（うちいわ）いです。和歌山県では内祝いの「のし」の表書きに紅色の墨を用いますが、他府県ではほとんど見られない風習なので注意したほうが良いようです。所が変われば常識が非常識になり、非常識が常識になるというよくある事例。いずれにしてもおめでたいことなので、「なんて非常識な」と目くじらを立てるのはやめましょう。

ほ 「星移り物変わるとも常若のまち和歌山市」。昭和三〇年に佐藤春夫（さとうはるお）が作詞し、山田耕筰（こうさく）が作曲した和歌山市歌の一部です。著名な詩人と音楽家が手がけた歌でありながら、知名度の低いのが残念なところ。歌詞をよく読んでみると、工業化の流れをちくっと批判する佐藤春夫の反骨精神も感じられて興味深いものがあります。和歌山市歌に込めた彼の思いは深かったのかもしれませんが。

ま 岡山の時鐘堂（じしょうどう）は、和歌山県立近代美術館東側の丘にある小さな鐘つき堂です。紀州徳川家五代藩主・徳川吉宗（とくがわよしむね）が設置させたという鐘楼で、大正期まで城下に時を知らせてきました。その後、再び鐘を鳴らし始めたのは現在の和歌山ユネスコ協会で、終戦から三年を経た八月一五日のことでした。世界の平和を祈るこの活動は全国に広がり、終戦記念日には日本の各地で鐘が鳴り響くようになったのです。

み ハマオモトとはハマユウの別名で、ヒガンバナ科の多年草。海岸線にたくましく自生して、清楚な白い花を咲かせます。雑賀崎の西端にある番所（ばんどこ）庭園でも、波打ち際に揺れるハマオモトが見られます。番所庭園は江戸時代に紀州藩の見張り所があった岬で、黒船の来航を監視していた「番所」の跡。夕暮れに芳香を放つ花の妖しさは、見張り番の心をも魅了したかもしれません。

む 加太の海辺に鎮座する淡嶋（あわしま）神社は、医薬の神様を祀る歴史ある神社です。女性の病気回復や子授け、安産祈願で信仰を集めてきました。拝殿には奉納された人形がぎっしりと並び、例年三月三日に行われる雛流し神事も全国的に知られています。先導する舟にひかれ、うらかな春の海をゆっくりと進む人形たち。おごそかで雅やかな光景を、多くの参拝者が祈りを込めて見守ります。

め 不老橋は紀州徳川家一〇代藩主・徳川治宝（はるとみ）の命によって架けられたアーチ型の優美な石橋です。アーチ型の石橋と言えば長崎市の眼鏡橋が有名ですが、和歌浦の不老橋はアーチがひとつの片眼鏡。アーチ部分は熊本から来た石工集団が手がけたそうで、日本中を移動していた職人たちの活躍ぶりがうかがえます。欄干を製作したのは湯浅の石工と推定され、渦を巻いたような雲の文様が見所です。

も その昔、誰もが知っていたという本脇（もとわき）の糸切餅（いときりもち）。棒状の餅を糸で切り、きな粉をまぶした素朴な和菓子です。射箭頭八幡神社（いやとはちまんじんじゃ）の名物として売られており、江戸時代の書物『紀伊国名所図会（きいのくにめいしよずえ）』にも記されます。昭和一〇年頃に途絶えてしまった

このお餅を、二一世紀に入り、復元させよう取り組みました。糸切餅は人々の熱意でよみがえり、神社の秋祭りでは屋台が出たとのこと。

や 和歌山市北部の栄谷に位置する和歌山大学は、教育・経済・システム工・観光の四つの学部からなる総合大学として、四千人を超える学生が学んでいます。かるたの言葉は和歌山大学歌の歌い出しです。和歌山大学は全国的に珍しい観光学部が設置されている大学として知られています。さて、このかるたで遊んでいる皆さんは、大きくなったら何を学んでみたいですか？

ゆ 毎年七月、和歌山港で盛大に開催される港祭（みなとまつり）は、およそ三千発もの花火が夜空を彩る市民に人気の夏祭りです。会場は万トنبースと呼ばれる中埠頭（なかふとう）。夜の潮風も心地よく、色とりどりの浴衣姿でやってくる若いカップルも多く見られます。途中ではぐれて探したり、懐かしい同級生にばったり出会ったり。慣れない下駄で足を傷めた経験も、ほろ酸っぱい夏の思い出かもしれません。

よ 西浜の養翠園（ようすいえん）は、江戸時代後期に紀州徳川家一〇代藩主・徳川治宝によって造営された広大な庭園です。特徴は和歌浦湾の海水を引き込んだ汐入りの池。海水を取り入れた大名庭園は珍しく、養翠園の他には東京の浜離宮恩賜庭園（はまりきゅうおんしていえん）しかありません。中国の西湖（せいこ）を模した三ツ橋（みつばし）も、天神山と章魚頭姿山（たこずしやま）を借景とした独特の風情。和歌山市を代表する名庭園は国の名勝にも指定され、往時の姿を今に留めています。

ら 陸奥亮子（むつりょうこ）は明治時代の政治家・陸奥宗光（むねみつ）の妻。陸奥宗光は天保一五年に紀州藩士の子として現在の和歌山市吹上に生まれました。江戸に遊学して坂本龍馬の海援隊に入り、明治維新後は新政府に仕えますが、反政府運動に加わった罪で五年間投獄されます。その間、獄中から亮子への思いを切々と綴った漢詩を贈り、また、出獄後に留学したヨーロッパからも多くの手紙をしたためたそうです。

り 紀州犬（きしゅういぬ）は和歌山県を原産とする中型犬とされています。勇猛で忠実な性格から、イノシシを追いかける狩猟犬として紀伊山地の猟師たちに重宝されてきました。鼻筋の通ったシャープな顔つきが魅力で、オオカミの血を引くともいわれます。ちなみに二〇一五年に開催された「紀の国わかやま国体」のPRキャラクターとして登場した「きいちゃん」も紀州犬。二足歩行でがんばっていますが、鼻筋はあまり通っていないかもしれません。

る 春と秋の彼岸の中日に、夕日から花のように光の玉が降る。古くから雑賀崎で語り継がれてきた「ハナフリ」という現象です。花が降る日の夕刻、人々は海辺に出て太陽が沈むのを静かに眺めました。この美しい風習を受け継ごうと活動が続いている市民団体があり、例年三月と九月になると、雑賀崎灯台の周辺では「ハナフリ」を待つ多くの参加者で賑わいます。

れ JR布施屋（ほしや）駅は紀ノ川に沿って走る和歌山線の無人駅。和歌山と奈良を結ぶ路線で、歴史は古く明治時代にさかのぼります。プラットフォームの基礎に積まれたレンガはフランダース式。いわゆる「フランス積み」とよばれるもので、レンガの小口と長手を交互に積んでゆく方式で、手間はかかりますが美しい柄が壁面

に現れます。文明開化の象徴でもあったレンガは今も、意外なところで職人たちの技術と美意識を伝えているのです。

ろ 例年五月に執り行われる紀州東照宮の大祭、和歌祭（わかまつり）。江戸時代を起源に持つ由緒ある神事で、時代絵巻さながらの壮麗な渡御（とぎょ）行列で知られます。団扇太鼓（うちわだいこ）や杵踊（きねおどり）、薙刀振（なぎなたふり）など様々な演目が披露されますが、中でも注目を集めるのは二一世紀に入り復興を遂げた御船歌（おふなうた）です。「和歌の浦には名所がござる、一にゃ権現（ごんげん）、二にゃ玉津島」。声高らかに故郷を讃える歌に、先人たちの熱い思いがあふれます。

わ 「若の浦に潮満ち来れば潟（かた）を無み葦辺をさして鶴（たづ）鳴き渡る」と詠んだのは万葉歌人・山部赤人（やまべのあかひと）です。聖武天皇が赤人を伴い和歌浦を訪れたのは神亀（しんき）元年。当時は弱浜（わかかはま）と呼ばれていましたが、奠供山からの景色に感激した聖武天皇が「名を改めて明光浦（あかのうら）とし、この景色を守りなさい」と命じました。鶴の姿はもう見られませんが、歌人たちがのこした歌は消えることのない言霊（ことだま）を宿しています。